

論文要約

ジャマイカと日本における「生き方」としての ラスタファーライの変容に関する文化人類学的研究

神本 秀爾

本学位申請論文は、カリブ海地域ジャマイカにおける、2005年から2009年にかけての通算約18ヶ月間のフィールドワークおよび、日本において、2013年から2014年にかけて、約12ヶ月間、断続的におこなったフィールドワークにもとづいている。

南北アメリカ大陸およびカリブ海地域には、16世紀以来プランテーションでの労働力として、西・中央アフリカから多くのアフリカ人奴隷が運び込まれた。その数の見積もりは研究者によって異なるが、1000万人以上とも言われている。これらの地域では先住民であったインディオ、植民者であったヨーロッパ人、アフリカ人奴隷の文化が入り混じり、それぞれに独自のグラデーションを残したクレオール文化を形成している。

かつて、メアリー・ルイズ・プラットは、そのような状況を理解する概念として、コンタクト・ゾーン概念を提示した。しかし、プラットはあくまで植民地主義の文脈で西欧を中心として見ているため、非西欧を中心とするコンタクト・ゾーンにおける展開が見えてこない。そこで、本研究では、ディアスポラ黒人を中心とした、全世界的なネットワークとなっているラスタファーライ（Rastafari）を事例として取り上げ検討対象とすることで、コンタクト・ゾーン概念を発展的に継承することを試みた。

本論文が対象とするラスタファーライとは、1930年にエチオピアにおいて、メネリクII世の親族である、タファリ・マコネン・ウォルデミカエル（Tafari Makonnen Woldemikael）がハイレ・セラシエI世（Haile Selassie 1st）として皇帝に即位したことを受けて、ジャマイカで始まった社会宗教運動の総称であり、これまでに、ラスタファリ・カルト（Rastafari cult）やラスタファリ運動（Rastafari Movement）などと呼ばれならわされてきたものである。

本研究の第一の目的は、ジャマイカのラスタファーライ宗派、エチオピア・アフリカ黒人国際会議派（Ethiopia Africa Black International Congress、以下会議派）に焦点を当て、宗派というまとまりが保たれているメカニズムを明らかにする。一方で、宗派というまとまりが存在しない日本の事例を扱った第II部では、脱地域的なコミュニティを対象として、日本人がラスタファーライを受け入れ根づかせていく過程を明らかにすることを目的とする。

第I部では、会議派とその周辺で生じている変化について論じる。ラスタファーライに関連する先行研究には、ジャマイカのラスタファーライを基準として、各地における変化を論じる傾向があ

る。しかし、本論文では、常にそのような視点が有効とは限らないことを指摘する。というのも、運動は、最初は中心から周辺に向けて展開していくとしても、それは最終的には中心へ還流しながら予測不可能な変容を進めていくものであるためであり、ラスタファーライの世界化は、ジャマイカのラスタファーライの特定の要素の脱中心化と再中心化を同時に進める現象ととらえられなければならないためである。本論文では、世界各地の人びとからしばしば羨望をもってまなざされ、実際に世界各地から人びとが訪れる空間である会議派の拠点ボボ・シャンティを、会議派らしさをめぐる交渉が常にさまざまなレベルでおこなわれている、最前線の現場ととらえている。

第2章では、ジャマイカおよびラスタファーライの概略を述べ、第3章では、会議派の概略を述べる。具体的には、会議派の成立史、宗派のテキストや信徒の語りの分析、コミュンであるボボ・シャンティにおける時空間の管理方法、信徒の概略を述べる。第4章では、ボボ・シャンティで暮らす信徒たちの経済活動について、個人化という視点から分析を加える。第4章では、会議派信徒を称するレゲエ・ミュージシャン（以下、会議派系ミュージシャン）の出現によって拡張された会議派と外部社会とのネットワークを利用することで、会議派、ボボ・シャンティを権威の中心に再び配置し、信徒と非信徒双方を巻き込んだネットワークの再編を進めていたことを明らかにする。第5章では、非ラスタのレゲエ・ファンと会議派をつなぐ存在である会議派系ミュージシャンに焦点を当て、彼らは、非排他的に会議派にコミットすることで、会議派以外のラスタファーライ・コミュニティ、ダンスホール・ラスタと、ラスタの一員という次元でつながりながら社会的な成功を目指す存在であったことを明らかにする。第6章では、再びボボ・シャンティで暮らす信徒を主な対象として、会議派における「黒人」「アフリカ（人）」の語の多義性と、その揺らぎについて検討を加える。第6章では、多様な背景や経験を抱えた信徒の参入が進む会議派のなかに、ディアスポラ黒人中心主義は根強く、人種や国籍といった差異にもとづく分断が生じる次元は存在するものの、自分の背景や経験に照らし合わせながら、エマニュエルの教えを体現しようとする信徒たちによって脱臼させられ、新たな連帯の次元が現れていることを明らかにする。

第II部では、日本におけるラスタファーライの事例を論じる。日本のラスタファーライに関する先行研究の第一の問題点は、日本におけるラスタファーライの土着化を論じるために、ジャマイカのラスタファーライをある種で一枚岩的なもの、特権的なものと位置づけていることである。第二の問題点は、日本のラスタファーライをサブ・カルチャーやカウンター・カルチャーという一過性の流行ととらえて理解を試みていることで、ラスタファーライの土着化のあり方を大きく方向づけている、宗教的・スピリチュアルな文脈との関連をとらえ損ねているということである。

本論文の第7章では日本におけるラスタファーライの展開史を、レゲエ史と関連づけて3期に分けて論じる。第8章では、ラスタファーライに関連する二冊の重要書籍『ライオンのうた Message Through Bob Marley』『シンクロ・バイブス』に見られる救済観と、日本人によるラスタファーライの位置づけ、実践を正当化する論理について参与観察、インタビューから得られた資料にもとづいて検討し、日本におけるラスタファーライ理解の特殊性について論じる。ここでは、土地に根付いたものとして自然や歴史が注目され、神話的過去やアイヌ文化を憧憬する、ニューエイジ・精神

世界的な姿勢と重なり合いながら、日本人の起源と経路が再解釈されていることを明らかにする。第 9 章では、日本人ラスタのラスタファーライへの参入経緯の変遷と、解釈及び実践の傾向性について論じる。具体的には、6 名のラスタのライフヒストリーと彼らの事例から抽出された 4 点の特徴について分析を加え、日本人ラスタたちは、グローバルなラスタファーライ・ネットワークへの帰属感と一体化願望を抱きながらも、非ラスタと共感するための回路を開き続けていることを明らかにする。第 10 章では、東日本大震災後の日本における、地域への愛着を喚起し、涵養しようとするまちづくりの局面に焦点を当て、ラスタファーライの思想がそれと分からない形で、ラスタと非ラスタが連携しておこなったうたづくりには織り込まれていることを明らかにする。